

同志社大学

2009年度 個人研究費研究経過・成果報告書

平成 22 年 3 月 16 日提出

所 属	職 名	氏 名
文 学 部	教 授	藤 井 俊 博
研 究 題 目	小説・物語の表現論的研究—文章構造と表現視点の関わり—	
研 究 成 果 の 概 要	<p>大きな枠組みとしては、物語テキストにおける文章構造と視点の面から研究を行っている。物語文においては、冒頭部分・展開部分・結末部分に分けたとき、それぞれにおいて、語り手の視点が大きく異なる。従来、視点の研究で多く取り上げられたのは、語り手の視点が見られるいわゆる草子地である。説話文学のような短編の説話集においては、草子地に当たる語り手の言説は集中的に現れる。即ち、冒頭部分と結末部分とである。今年度は冒頭部分の段落を取り上げて、冒頭段落の表現内容の特色を探った。具体的には今昔物語集を取り上げ、その冒頭部分において助動詞「けり」がどのような表現内容に用いられているか、また、それが巻毎の文体とどのように関わるかについて考察をした。その結果、「けり」は特に主人公の名前を解説する文に多く用いられていること、また、巻 1 から巻 10 の天竺震旦部においては「けり」の係り結びは用いられず、巻 11~巻 30 における本朝部の説話において集中して用いられていることを明らかにした。</p> <p>その成果として次の論文を公表した。</p> <p>○「今昔物語集の『けり』のテキスト機能—冒頭段落における文体的変異について」（月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編『古典語研究の焦点』武蔵野書院、2010・1） この書は、藤井を含む三名の編集による論文集であり、この編集をも担当した。</p> <p>その他下記の成果を公開した。</p> <p>○糸井通浩・半沢幹一編『日本語表現学を学ぶ人のために』（世界思想社、2009・8）の第四章「日本語表現の歴史」第一節「文章表現の歴史」（168-187）</p>	